

最後の手紙 千野香織様へ

北京日本学研究中心にて 2002年 1月 9日

稲賀 繁美

(いながしげみ/国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学)

どなたのご手配になるものか定かではありませんが、学習院大学哲学研究室からの電信が、勤め先の配慮で、北京にまで回送されてきました。不審に思って封を切るや、悲しいお知らせに接しました。曇天のなか、1月9日の午後のことでした。まさか、との念が一瞬脳裏をかすめ、やがて茫然自失するままだに、いまこうして定かならぬ光景を書き留めています。

思いがけなく出会った、という記憶がまず点滅します。あれは、たしか1992年、ケンブリッジのハーヴァード大学構内でのことだったかと思います。ちょうどフォッグ美術館からライシャワー・センターに抜ける途中の街路でのことでした。9月にシカゴ大学で文化間理解に関する討論集会有り、ラシュディーの『悪魔の詩』の訳者で、その前の年に暗殺された五十嵐一のことを報告したところででした。それが終わってからニュー・ヨーク経由で、その日の昼近く、飛行機でローガン空港に到着したばかりの私は、ノーマン・ブライソンと面会の約束がありました。すこし汗ばむほどの夏の終わりの晴天のした、向こうから、どこか見慣れた容貌の、黒髪も麗しい東洋人の女性が、軽やかに歩んでくるのに気づきました。こちらが誰と気づくより一瞬はやく、千野さんのほうから、当方の名前を呼んで、声を掛けてくださったように記憶し

ています。至福の出会いでした。国内ですでに何かの機会に知り合っていたことになりますが、その記憶は今では失われています。その日の午前から北米滞在の新学期が始まったところ、とのことでした。今から思い返せば、ジェンダー批評という、千野さんの新たな活動の領野が、これから花開いてゆこうとする、その端緒の季節でした。

不思議と海外でお会いした記憶ばかりが蘇ります。それから何年後でしょうか、ハワイで開催された全米アジア学会のおり、千野さんは、池田忍さんなどとともに、日本美術史のジェンダー研究に関するパネルに係わっておられました。ひとつ別のパネルで既に発表を済まされた最終日だったでしょうか、日本美術研究者の集まったセッションで、発表者ではなかったのに、なぜかその分野での代表的な日本の研究者ということで、不意に指名があり、即興で短評を加えられる、という場面に立ち会いました。参加者からの惜しめない拍手からも、北米の若手の日本美術史研究者たちの千野さんに対する信頼と期待のほどが、痛いほど伝わりました。日本での最新の研究状況を紹介する義務とともに、逆に日本では北米でのジェンダー研究の最前線を広めて行く役割も担う、千野さんの責任の重さが、一傍聴者にも伝わりました。もとより北米の学会で人気者となることなど生理的に忌避

してもいたし、そんな才覚など持ち合わせない青二才として、いささかの義望を覚えなかったといえば嘘でしょう。

スミエ・ジョーンズが組織した何度かの春画シンポジウムの席上では、いささか意地悪な反論を浴びせたことも事実です。そんな生意気な若輩ものなのに、数年後千野さんは、ご自身の学習院大学の公開講演会に、当方をわざわざ講演者として呼びくださいました。研究室周辺での学生さんたちの振る舞いを見るにつけても、日本的な権威主義や陰湿さとは無縁の、爽やかな風があたりを吹き抜けていて、心底羨ましく思ったものでした。そうこうするうち、国立文化財研究所が主催した『今、日本の美術史学を振り返る』への批評では、千野さんの、ジェンダー研究が「すべてを変える」という勇ましい宣言に対して、哲学中年じみた理屈っぽい反論を加えたところ、イメージ&ジェンダー研究会の何人かの有力メンバーから、(望外と申すべき)痛烈な再批判をいただきました。その後一年以上もたってから、千野さん自らの総括も『女? 日本? 美? ——新たなジェンダー批評に向けて』(編=熊倉敏聡・千野香織, 1999)に公表されました。当方としては、総括という高飛車な姿勢と、論争相手に再反論の場所を与えない単行本としての出版形態、さらには対話そのものを拒絶しようとする一部周囲の反応に疑念を覚えましたが、それ以上に、自分に無理強いされた反論の、論理の破綻を悲しく思ったことでした。

あれは97年、ダイアナ妃「国民葬」と奇しくも日程が重なった、イースト・アングリア大学での学会『日・欧における傑作と巨匠』の際だったかと思います。男性による一方的な女性支配でしかない事態に「異性愛」といった舶来概念の訳語を当てはめることの危険性。また、historyに対抗してherstoryを対立概念として提唱するのは、新左翼的代替論への退行でしかなく、むしろstoryというものの魔力の究明こそが歴史研究の使命ではないか。男性的

規範のmasterpiece称賛の陰に隠されたmistresspieceの認知を訴えるのでは、canonを巡る権力闘争そのものを批判する意図とは矛盾する——そんな議論を闘わしたことも懐かしく思い出されます。ところがその水準以前に逆戻りするような論争のために、結局千野さんの貴重なお時間を割かせてしまいました。千野さんに、社会的責務としてそれを強いた知的環境に、なにか暗澹とした気分を味わったことは否めません。とはいえ、仕方なく私信にて綴った再反論に、千野さんは、いつものように端正な文字のお葉書で、論点ごとに懇切なご返事をくださいました。いずれ公表のご許可を戴こうと思っていたこの葉書ですが、もはや諾否を確かめることも叶いません。

とかくこの国では、論争となれば相手の人格までも否定するような短絡が横行します。でも千野さんはそうした愚劣からは自由な方でした。配慮溢れるご返事のお葉書を拝読しながら、猛烈なご多忙のなか、いちいち丁寧に、こうした片々たる来信への返信にまで気を遣われるのでは、さぞかし大変だろうと、申し訳なく思いました。元来は高野山で開かれた国際研究集会をもとにした『美術史と他者』でも、結局千野さんの原稿だけが戴けぬまま、見切り発車で発刊されました。ご家庭は言わずもがな、国内の教育、大学行政そして学会の責務を果たすだけでも大変なのに、海外への働きかけに加えて、千野さんを慕う留学生も増え、毎週のような研究会の開催もありました。いかに充実したご活躍ぶりとは申せ、常人ではとうていこなせない何人分もの重責が、おひとりの双肩に掛かっていたのは、はた目にも明らかでした。女子学生が大多数を占める研究分野で、教職や専門職の9割はなお男性が占めている、という極端に振れた職場環境にあって、女性研究者の恵まれない環境を打破するために尽力することは、同時に戦後日本の学生運動を一挙に集約して、ひとりで経験し直す苦闘でもあり、また重畳する社会的義務や低劣な嫉妬

心、そして中傷にも、ひとつひとつ誠意をもって当たる激務が要求されていたでしょう。カミング・アウトすれば正義だ、と言いつける千野さんに、まずそれを許す社会環境を整えないと、かえって犠牲者が増えますよ、などと諫言めいた忠告をした自分が、実は千野さんご自身の置かれた苦境に、いかに無理解だったことか。2年ほどまえから、なにかと咳き込みがちで、いつも掠れ声になっておられたそのご様子が、内心配でした。今は、余人をもって代えがたい、そのお働きを尊く追慕し、国際的にも高い評価を得た研究室から忽然と去ったそのあとに残された、学生の皆様の悲嘆を思うばかりです。

ここ数年、東京では親しく意見を闘わす機会もなくなりました。でも関西では、国立民族学博物館での研究会などで、最後まで知的刺激を受け、互いに忌憚なく批評する機会のあったのが何よりでした。沖縄は糸満の戦没者慰霊碑に自分の親族の名前の刻まれることを拒絶した徴用韓国人犠牲者の遺族を前にして、その事実をこそ近代日本美術史に刻むべき、と主張される千野さんに対して、刻まれることを拒絶する人々の意思を、あくまで恥ずべき欠落として心に刻むことこそ大切、と反論した記憶があります。記念碑と記憶の政治学、といえ、すでに5年前のアムステルダム国際美術

史学会の主題だったのに、日本からそれに関する発表がひとつもなかったことに、我々はともに苛立っていたのだと思います。

つい先日まで、北京で中国の学生たちを相手に、そのうち千野香織というすばらしい先生をお招きするから楽しみに、私の講義などその反面教師にすぎませんよ、などと宣伝していたのに、それがもはや果たせない夢だとは、何と残酷なことでしょうか。国境の枠を越えたアジア美術史の生態を、中国、韓国をはじめとする各地の学生たちを交えて再検討するのは、千野さん未完のお仕事を導きとして、残された者が果たしゆくべき使命です。自分の生涯をみずからの信ずるところに捧げられた同時代人として、イスラームに殉じた五十嵐一に加えて、千野香織というお名前を、謹んで私の心に刻み、祈念することを、どうかお許しくださいますように。

千野さん、またどこかで、お会いしましょう。あのハーヴァードのキャンパスの秋の日のように。

北京市白石橋の宿舎にて 稲賀繁美

* 千野香織氏の一周忌をまえにして、昨年のお別れの会のために、北京で急遽執筆した原稿を公表させていただきます。

あらためて御霊に謹んで深く哀悼の意を表します。